

日語形容詞的通感性比喻表現： 以其次類劃分的角度來看

劉懿禎

開南大學應用日語學系助理教授

摘要

本研究嘗試透過日語形容詞次類劃分的角度來探討其「通感性比喻表現」的課題。研究範圍雖以廣義的「形容詞」(包含形容詞和形容名詞)為主，但現階段先鎖定「i 形容詞」作為語彙調查的對象。關於研究方法，在第一階段以型態論、構文論、和衍生語法中的論元構造、語意角色的分析為手段，探討了日語形容詞次類劃分的依據和功能。第二階段，進一步分析了日語形容詞作為「述語」時所具有的「語法結構」和「語意結構」之間，扮演「連結規律」作用的「詞彙概念結構；LCS」。本論文，是作為第三階段，為了更深入探討日語形容詞所具有的認知性「語意特徵」和「語意結構」，特地針對其「通感性比喻表現」進行分析與討論。

在現階段得到的結論如下：首先，在關於日語形容詞「通感性比喻表現」之「方向性」的前人文獻中，可看到「單方向」「雙方向」甚至「多方向」的觀點。本論文支持「多方向」的論點。只是，必須強調的是，其語意方向的轉換，不只是在「感覺形容詞」和「情意形容詞」之間也發生了，本論文還提出一個假設，那就是：日語形容詞所有的「通感性比喻表現」的「語意轉換」現象，可以說是都先經由轉為「評價形容詞」這一方向才發生的。

關鍵詞：日語形容詞、次類劃分、通感性比喻表現、語意擴張與轉換、多方向性

日本語形容詞における共感覚的比喩表現： その下位分類の視点からみる

劉 懿禎(りゅういしん)

開南大學応用外国語学科助理教授

要旨

本稿では、日本語形容詞における「共感覚的比喩表現」をその下位分類の視点から改めて考察してみた。研究範囲は日本語の広義な「形容(名)詞」にするが、現段階の語彙調査の対象をまず「イ形容詞」にしぼった。研究方法としては、第一段階で形態論・統語論・生成文法に関する述語の項構造・主題役割を接近法として日本語形容詞の下位分類の基準と機能をみてきた。第二段階で、さらに、日本語形容詞の述語としての「統語構造」と「意味構造」とのあいだに、リンキング・ルールとしての「語彙概念構造」を分析してみた。本稿では、研究の第三段階として、より深く日本語形容詞に関する認知的な「意味特徴・意味構造」を探究するために、それに関する「共感覚的比喩表現」をみてみた。

現段階の結論としては、日本語形容詞の「共感覚的比喩表現」の方向性についての先行研究では、「一方向性」と「両方向性」、さらに「多方向性」という見方があるが、本稿は「多方向性」の論点を支持する。ただし、意味転換は「感覚形容詞」と「情意形容詞」のあいだでも起こることを強調するだけでなく、ほとんどは「評価形容詞」を経由した結果だという仮説も提出した。

キーワード：日本語形容詞、下位分類、共感覚的比喩表現、意味拡張
と意味転換、多方向性

**A Study of the Synaesthetic metaphor of the Japanese
Adjectives:
from the view point of the Taxonomy**

Liu, Yi-chen

Department of Applied Japanese Language, Kainan University
Assistant Professor

Abstract

The object of this paper is to study the Synaesthetic metaphor of the Japanese Adjectives from the view point of the Taxonomy. Three approaches are used in this paper. The first approach is to analysis the semantic contents and syntactic feature of Japanese adjectives. The second approach is to study the lexical conceptual structure by using the linking rule. The third approach goes more deeply to discuss the structure of cognitive meanings of the Japanese adjectives. Since many Japanese adjectives are used to describe human perception, we investigate "synaesthetic metaphor" in order to disclose the essence of the Japanese adjectives.

Following the three approaches, three important conclusions are obtained. First, the Japanese adjectives are discussed, analyzed and sub-classified into 3 categories: (1) objective/property adjectives, (2) subjective/emotive adjectives, and (3) intermediate/evaluative adjectives. Second, the phenomenon of the semantic extension and transfer exists in the use of the Japanese adjectives. Finally, the semantic transfer is multi-directional rather than one-directional.

keywords: the Japanese adjectives, the Taxonomy, the Synaesthetic metaphor, the semantic extension and transfer, multi-directional

日本語形容詞における共感覚的比喩表現： その下位分類の視点からみる

劉 懿禎(りゅういしん)

開南大學応用外国語学科助理教授

1. はじめに

日本語の形容詞は「客観・属性形容詞」「中間・評価形容詞」「主観・感情形容詞」に分けることができると思われる。湯(2006,2008)と劉(2007)は、日本語形容詞の意味的特徴と統語的特徴を分析しながら、あらためてその下位分類を試行した。

(劉(2008,2009))はさらに、日本語形容詞の下位分類と下位再分類を確認しながら、各類別の形容詞がどのような語彙概念構造(lexical conceptual structure; LCS)¹をもつかについても検証してみた。それは、分析の方向を変えて、すでに分類(グループ分け)された形容詞の5つの類別に対応する LCS の記述をすることによって、形容詞の語彙概念構造(LCS)の分析を通して、それらを分類の基準にすることができるかと検証してみたのである²。それに関する考察の結果は、付表(1)と(2)を作った。

(1) 日本語形容(名)詞の下位分類と項構造・意味役割(付表(1)を参照)

(2) 日本語形容(名)詞の下位分類と語彙概念構造(付表(2)を参照)

本稿では、日本語形容詞の意味的特徴をより深く探求するために、形容詞の下位分類の視点から「共感覚的比喩表現」の方向性を分析してみた³。具体的な手順として、まず、実例をみながら形容詞の類別

¹ 「語彙概念構造」(LCS)とは、「述語(特に動詞)の意味を、基本意味述語を用いた意味分解の手法を用いて記述する表記体系である」(伊藤(2005: 5))。伊藤(2005)などを参照する。

² 具体的に言うと、劉(2008,2009)は、まず、形容詞のもつ統語的特徴による項構造からリンキング・ルール(linking rule)を通してその語彙概念構造(LCS)を推定し、それと同時に、形容詞の意味的特徴とその下位分類の基準との関係を交叉的に探求してみたのである。

³ 具体的にいうと、本稿では、劉(2007,2008,2009)において「形態論」「統語論」や「生成文法」の考察方法を「日本語形容詞の下位分類」という研究課題の接近法としてから、より緻密に研究対象

と「共感覚による意味転換⁴の方向性」との関係を考察してみた。そして、考察の焦点をしぼるために、日本語の学習語彙から、教育レベル C⁵に属する形容詞の基礎語彙を対象とした。つぎに、形容詞の下位分類において、もっとも意味が転換されやすい「五感表現」に関する「知覚形容詞」にしぼって、例文を収集・分析してきた⁶。

現段階の結論としては、以下のように3点でまとめられる。

(1) 日本語形容詞は(i)「客観・属性形容詞」(ii)「主観・感情形容詞」(iii)「中間・評価形容詞」⁷に下位分類できると観察された。そしてそれぞれはさらに①「知覚形容詞」②「関係形容詞」③「感覚形容詞」④「情意形容詞」⑤「中間・評価形容詞」に分けることができる。

(2) 日本語の形容詞表現においては、とくに「五感表現」(主に「知覚形容詞」)では「共感覚的比喩表現」があると観察された。

(3) 日本語形容詞の「共感覚的比喩表現」の方向性についての先行研究では、「一方向性」と「両方向性」、さらに、「多方向性」という見方があるが、本稿は、「多方向性」の論点を支持する。ただし、それは「感覚形容詞」と「情意形容詞」のあいだでも起こることを強調するだけでなく、ほとんどは「評価形容詞」を経由した結果だという仮説も提出した。

の「意味特徴」を探求するために、認知言語学から研究方法を探した。それは、言語の「音韻部門」と「統語部門」のほかに、「意味部門」こそがもっともあいまいで、具現化されにくい領域だと考えられるのである。本稿では、日本語形容詞の「統語部門」に関わる「項構造」の分析から出発して、「語彙概念構造」を語彙の「意味部門」との連結するリンキングルールとして分析してみた。

⁴ 「意味拡張」とも呼ばれる。そして、「認知的比喩」による「意味拡張・意味転換」は「メタファー」「メトニミー」「シネクドキー」の3種類に分けられる。

⁵ 専門教育出版(1991)は『一万語語彙分類表』では、収録される日本語を学習レベルの三段階に応じて分類されている(劉(2007:57)を参照)。

⁶ 用例は先行文献やコーパスから収集されたものであるが、その出典については長い引用や文学作品だけを記す。

⁷ 中間的な範疇に属する形容詞は、客観的な形容詞と同じく、外界の対象を主語とする1項述語であると同時に、主観的な形容詞と同じく、言語主語の主観性に基づく「評価性」が含まれる。また、必要があれば、言語主語・経験者が具現化されることもある(「個別化の二格」による)。それゆえ、厳密にいうと、主観的な形容詞でもある。しかし、その「中間性」を保つために、拙論では、「主観性」の代わりに、「中間性・評価性」という用語を使ってみた。

2. 「共感覚」と「共感覚表現」

人間は知覚器官でさまざまな「感覚」を受けてから、脳内で「概念化」する能力をもっているといわれている。具体的にいうと、人間は、五感器官(よく「目・耳・鼻・舌・皮膚」にまとめられ)で外界の映像や音声、匂い・味・触感を感じ取ってから、それと関連がある細胞の反射・反応が起こるだけですむわけではなく、脳内でもっと深刻・複雑な一連の、まとめて「感覚」や「認知」という活動が作動すると思われている。そして、人間はほかの動物ともっとも大きな違いは、人間は知覚活動をするとき、ただ即刻に反応するだけではなく、何かの「脳内メカニズム」で、概念化したり、言語化したりして、さらに、記憶する能力をもっていると考えられる。とくに、人間が外界から受け取った「感覚」を言語化する能力は、人類進化の成功に深く関わっている原因だと思われる。

人間の(高度進化した結果、文明が始まってからいう)「感覚表現」は実際には「言語」だけではなく、音楽や美術、さらに舞踊などもある。そして、「共感覚者」に対する研究によると、人間の脳内では数字・アルファベットから色、或いは、メロディから色など、つまり一種の感覚(五感の一つ)を受けた同時に、ほかの種類の感覚を連動的に引き起こすという現象があるとわかった。それは大変面白い脳神経科学に関する領域の研究であるが、本稿では、人間の言語の「共感覚表現」と関係がある部分だけにしぼって考察してみた。

「共感覚」(synaesthesia)はもともと心理学の術語であるが、言語学においては、ある領域の感覚を表す言語表現を用いて、他の領域の感覚を表すことをいう⁸(劉(2007: 233))。先行文献では、人間の5つの感覚表現については、均等ではなく、偏った使用状況があるという言語現象が観察された。蔡(2006: 170)は『感覚表現辞典』(中村(1999,2000))の統計を援用して、日本文学作品における感覚を表す比

⁸ 辻(2002: 53)は共感覚について、次のように紹介している。「共感覚とは、このように1つの知覚刺激(たとえば、色彩)が、それに対応する知覚(たとえば、視覚)だけでなく、別の知覚(たとえば、音声としての聴覚)としても同時に生ずるような現象を指す。」

喩表現を実例調査したうえで、「日本語の感覚表現は、その五感に均等に出てくるわけではない。」と指摘している。結論として、「視覚＞聴覚(視聴覚を合せると全体の約七割にも達する)＞触覚(全体の一割五分ほどにのぼり)＞臭覚＞味覚」とまとめられている。それは、なぜだろうか。以下では、日本語形容詞に関する「共感覚表現」にしばってみてみる。

3. 日本語の共感覚的比喩表現

「共感覚的比喩表現」(synaesthetic metaphor)⁹については、まず、認知レベルと言語レベルとの「共感覚表現」と「比喩表現」とをいっしょに考える必要がある。言語表現における「五感表現」(例えば、「大きい・うるさい・香ばしい・甘い・冷たい」など)に関する「認知の仕組み」は実際に3つの階層構造に分けることができると思われる。つまり、「身体レベル」「認知レベル」と「言語レベル」である。例えば、人が「味」に関する感覚表現を表すとき、第三のレベルの「言語のレベル」まで作動されるのである。先行研究の中で、張(2010)は日本語の「甘い」や「辛い」という形容詞表現は、実際に以下のような三レベルの脳内メカニズムによって生成したと指摘している。

- (3)〔前略〕これは、第二レベルの情緒・感覚的意味に基づくイメージや概念メタファー、エピソード記憶や連想に基づいて、言語表現として、共感覚的表現や比喩表現、オノマトペを生成する段階である。こうした言語表現は、味に関する知識や経験を他社に伝達したり、記憶や知識に蓄えたりすることを通して第二レベルに影響を及ぼす。〔中略〕脳で食べ物・飲み物に関する感覚情報を統合し、解釈するために、関連する知識や過去経験を利用する。ここでは、感情・感覚的意味によるイメージを形成する。さらに、

⁹ 先行研究によると、人間は「共感覚者」でなくても、「共感覚表現」や「比喩表現」を理解したり使用したりする言語能力をもっているはずである。その場合も含めるので、本稿では、直接に「共感覚比喩表現」といわず、「共感覚的比喩表現」という用語を使うことにする。

情緒・感覚的意味に基づくイメージや概念メタファー・エピソード記憶や連想に基づいて、言語表現として、「甘い」や「辛い」の共感覚的表現や比喩表現を生成するのである。(張(2010: 24))

要するに、「共感覚的比喩表現」というのは、言語使用者、つまり、人間は脳内で認知レベルの「共感覚」と「認知的比喩」から作動し始まり、それから、言語レベルの「共感覚的比喩表現」を生成し、使用したり理解したりするのである。

実際には、「共感覚的比喩表現」は人間の文学作品にだけみられるのではなく、日常的につねに使われている「修辞法」、強いて言えば、コミュニケーションのうえの「言語のあや(彩)」であろう。そして、五感に関する表現の中で、「形容詞」(日本語の場合では、「形容名詞」、も含む)という文法的カテゴリー(品詞)が多数を占めている。

3. 1 日本語の下位分類からみる「共感覚的比喩表現」

日本語の数多くの形容詞を下位分類からみると、「客観的属性形容詞」(「知覚形容詞」と「関係形容詞」を含む)、「主観的感情形容詞」(「情意形容詞」と「感覚形容詞」を含む)、さらに「中間的な評価形容詞」というように体系化することができる(湯(2006,2008)・劉(2007))。その中で、「知覚形容詞」はさらに知覚をする身体部位の区別により、5つの感覚器官のそれぞれによる「視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚」形容詞、そして、総合知覚による「次元形容詞」¹⁰と温度関係の「温覚・体覚形容詞」がある。「共感覚的比喩表現」に関するもっとも多い類別は、「視覚」や「聴覚」に関する形容詞(そして、総合判断による「次元形容詞」も含む)なのである。

Derek Tastes of Earwax BS(2004)¹¹の調査によると、「共感覚者」には、数字やアルファベットさらに音楽を聞くと色が見えたり、言葉を耳にすると味を感じたりする人が世の中にいるとわかった。そして、

¹⁰ 「次元形容詞」の概念と内容は国広(1982,1989)・頼(2005)などでも詳しく論じられている。

¹¹ 「“共感覚”の不思議言葉を聴くと色が見えるなど～言葉誕生の謎に迫る～共感覚は創造力を助成するのか」(Derek Tastes of Earwax BS(2004: 1))

「色が見えるというのは、共感覚の中で、最も多く見られる現象」だと実証された(Derek Tastes of Earwax BS(2004 : 2))。つまり、聴覚器官で外界の音声を受け取るとき、同時に「脳内・脳神経」で「聴覚」と「視覚」の「感覚」を起こす¹²、という特別な「能力」を持つ「共感覚者」が全体の中で一番高いパーセンテージを占めているのである¹³。さらに、イギリスでの相関研究によると、「耳で聞いた言葉に、味を感じるといふ、非常に変わった共感覚の持ち主」も存在することがわかった。

しかし、我々「一般人」が、そういうようにはっきりと「共感覚能力」をもっていなくても、何かの脳内作用で、日常の言語生活で「共感覚的比喩表現」を理解したり、使用したりしているのだといわれている。その謎を解く「鍵」は、「言葉誕生の謎に迫る¹⁴」ことができると指摘する相関領域の学者たちもいるのだ。

3. 2 日本語形容詞の共感覚的比喩表現の方向性

視点を換えてみると、日本語形容詞の下位分類のあいだでも、共感覚による転用¹⁵の現象がみられる。つまり、もともとある特定の類別に属する形容詞が、別の類別の形容詞として用いられるとき、「元来の形容詞が、共感覚に基づいて、比喩的に転用される」という現象である。

そして、特に形容詞表現に限らないが、先行研究ではよく「『共感覚』による『意味転換』の『方向性』」が議論されている。

以下では、まず、先行文献で指摘される共感覚(表現)の方向性につ

¹² それは「音を聞くと脳の聴覚野だけでなく、視覚野も反応している」「文字や数字を目にし、或いは聴くと色が見える」からである。(Derek Tastes of Earwax BS(2004 : 8))

¹³ 「こうした人たちは、共感覚を持っていると言われています。共感覚とは、1つの感覚が別の感覚を呼び起こす現象です。」「英国人の100人に1人が共感覚を持つ」「数字に色を感じる人の6割が立体的な数字の配列を見ている」(Derek Tastes of Earwax BS(2004 : 1))

¹⁴ 「つまり、人間は一体どんな脳内メカニズムで言葉を使っているか」という言語の本質を迫る課題にも関わっている。「研究者たちは、共感覚を持つ人の脳の中で、何が起きているのか。その解明に乗り出しました。」(Derek Tastes of Earwax BS(2004 : 6))

¹⁵ 共感覚による「意味拡張」や「意味転換」とも呼ばれる。つまり、比喩(認知言語学での広義のメタファー)に関係のある概念である。ここでは、まだ「比喩・メタファー」に関する研究課題を深く探求する余地がないので、あえて、「共感覚による転用」という言い方をする。

いてみる。

(i)Ullmann(1962)や Williams(1976)(辻(2002)による間接引用)

(4)共感覚表現の方向



(Williams1976 : 463)(斜体文字は辻(2002 : 53)による)

共感覚表現における転用は、低次の、あまり分化されていない感覚から高次の、より分化された感覚へなされることが Ullmann(1962)・Williams(1976)に観察されている。しかし、それはとくに、印欧語を対象とする場合である。日本語の共感覚に対する観察の先行文献では、国広(1989)はもっとも代表的であろう。

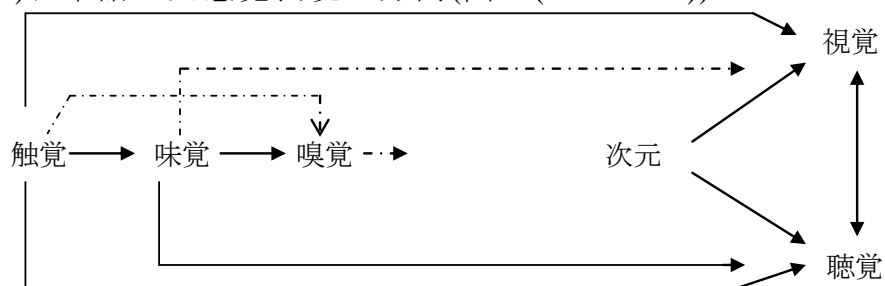
(ii)国広(1989)

(5)「視覚・聴覚・臭覚・触覚の五つの感覚分野を表わす形容詞の間に「共感覚的比喻」(synaesthetic metaphor)用法があることは早くから知られているが、J.M.Williams(1976)は、比喻の方向が一般的に一方方向的であることを指摘した。」

「この一方方向性を取り入れると、五感の一つの体系にまとめられることになる。この一方方向性には多少の例外があるが、大体の傾向として認められるものである。」 (国広(1989 : 28))

国広(1989 : 28)は以上のように先行研究を紹介してから、日本語の場合は、ほかに「味覚→視覚」と「触覚→臭覚」という方向性も観察されると指摘して、つぎのように図示している。

(6)日本語の共感覚表現の方向(国広(1989 : 28))

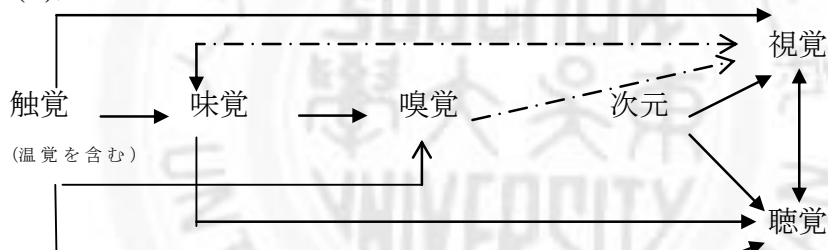


要するに、「方向はすべて左から右への一方向である」ことと「視覚と聴覚と同じように 最右端に位置しているばかりでなく相互の間に比喩がなされる」こと、さらに「次元比的比喩がなされる点で他のすべての感覚分野とは性質をことにしている」ことは、日本語の共感覚の特性であると国広(1989)が主張する。つまり、国広(1989)はWilliams(1976)の方向性に賛成しているが、日本語の独自性をも強調している。

(iii) 亀井他(1996)

亀井他(1996)は、言語学の基礎用語を紹介する立場から、共感覚の現象と英語の用例の日本語訳をあげている（紙幅の制限で、用例を省略し、筆者の描いた図だけ記す）。

(7) 英語形容詞の日本語訳の示す共感覚の方向



（亀井他（1996）による用例の図示）（図は筆者の描いたもの）

結果として、英語の形容詞を日本語に訳した場合は、共感覚の方向性は一方向ではなく、双方向性であることが観察された。以下では、亀井他(1996：286)に指摘された「知覚形容詞」から、「評価形容詞」に移行しつつある例を記す。

(8) a. 「たかい品物/教養/評判/身分」

b. 「大きな人物/問題/意味」 c. 「大きな関心/山場/態度」

d. 「まるい人柄」

e. 「ふかい感動/因縁」

f. 「かんばしい成績」

g. 「くさい人物」

h. 「あたたかい心」

i. 「すずしい顔」

(iv) 谷口(2003)

引き続いて、谷口(2003)を参考にして、メタファーとメトニミーの

視点から、共感覚の比喩表現の方向性をみてみる。谷口(2003: 1)は「A 先生は鬼だ。」(メタファー; 類似性)、「やかんが沸騰している。」(メトニミー; 容器と内容による近接関係)を日本語の例として、以下のように比喩表現の定義をくだした(谷口(2003: 2-3))。

(9)メタファーとメトニミーに関する伝統的定義

a.メタファーの定義: 「類義性に基づく比喩」¹⁶

b.メトニミーの定義: 「近接性に基づく比喩」

谷口(2003)はさらに「共感覚の比喩表現」について、つぎのように説明して、例文をあげている。

(10)「共感覚(synaesthesia)の比喩表現も、おもに形容詞の意義転換の観点から研究されてきた重要な現象である」

「「共感覚比喩」とは、ある感覚に関係する名詞表現が、他の感覚に関係する形容詞によって修飾される表現を指す」

(11) a. 「甘い音」(味覚→聴覚))

b. 「柔らかい声」(触覚→聴覚)

c. 「うるさい模様」(聴覚→視覚) (谷口(2003: 4))

谷口(2003)は Ullmann(1962)と Williams(1976)を紹介しながら、以上の例はメタファーによる表現だとつぎのように説明している。

(12)「〔筆者: Ullmann(1962)によると、以上は〕感覚相互の類似性に基づいているためメタファーである」「触覚が他の感覚へもっとも転用されやすいという傾向に気づいてはいるが、実際に感覚間にどのような転用パターンがあるのか、詳細な分析については、次の Williams(1976)を待たねばならなかった。」(谷口(2003: 4-55))

さらに、谷口(2003: 2)は言語の比喩表現の視点から、メタファーとメトニミーのあいだには実際に接点があり、連続体をなしていると指摘する。そして、前者(メタファー)は「類似性や共起性に動機づけられた領域間の写像であり、メトニミーは近接性に基づく単一領域内の写像である」という大きな相違性があることを強調するが、「類似

¹⁶ それを直喩(〔筆者: 日本語の場合は「～の{ように/ような/ようだ}」構文である)と区別すべきと谷口(2003: 3)が指摘している。

性と近接性は互いに対立する意味関係ではなく、むしろ両者が重なり合い、ゆるやかな連続体をなすものと考えた方がよいようである」(谷口(2003: iv))ともいっている。

また、「メタファーのメトニミー的基盤」について谷口(2003: 160)は、以下のように説明する。

(13)「〔前略〕、メタファーは「領域間の写像」であり、起点領域と目標領域の間に対応関係を結ぶことで成立する。このような捉える理由として、メタファーが必ずしも類似性だけではなく、共起性にも基づいているという理由があった。」(谷口(2003: 158))

「これらのメタファーは、まさに経験の共起性に由来しており、その基盤は近接性、したあってメトニミー的であると言える。」

「ある表現や概念がメタファーであるかメトニミーであるかの区別は、それをどのような分化段階で見るかにもよると言える。」

要するに、谷口(2003)は Ullmann(1962)と Williams(1976)に提出された「共感覚の一方向性」に賛成するのである。ただし、共感覚表現は「類似性によるメタファーの表現」であるか、「近接・共起性によるメトニミーの表現」であるかという点に独自の見解をもっている。

(14)「共感覚表現は、これまで主にメタファーとして分析されてきた。」「…、触覚という領域での「やわらかさ」の感覚が、味覚という領域での経験に何らかの点で合致しており、したがって両感覚領域の間に類似性があるため、「やらかい味」という表現が成立するのだと考えれば、定義上メタファーであると言える。」(谷口(2003: 160))

(15)メタファーの例(筆者の整理)：

a. やわらかい{味/声}(触覚→味覚/触覚→聴覚)

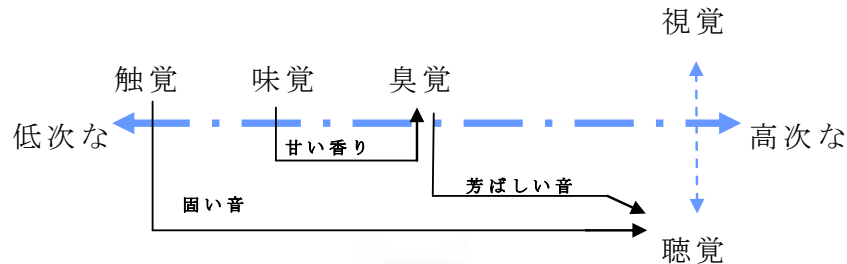
b. あかるい声(視覚→聴覚)

そして、以下の用例は「メタファーによるか、メトニミーによるか」を断言しにくい表現であると谷口(2003: 160-161)が指摘している。

(16)a. 「甘い香り」(味覚→嗅覚)

b. ①「こうばしい音」(嗅覚→聴覚)②「固い音」(触覚→聴覚)

(17)メタファーかメトニミーかと判断しにくい例 (筆者の描いた図)



つまり、谷口(2003:160-162)の見解では、こうした例は「共起し合う1つの知覚で他の知覚を指示するメトニミーと分析したら」よいか、それとも「メタファー」と分析したらよいかと戸惑われる表現である¹⁷。

結論として、「領域交替の有無」により、共感覚表現にも、メタファーかメトニミーか判定しにくい現象があり、両者のあいだに、連続体をなしていると谷口(2003:162)は指摘する。

(v)頼(2005)

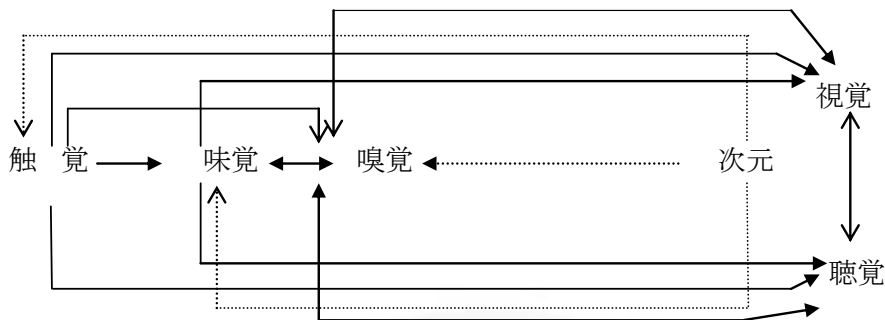
頼(2005)は、「日本語共感覚・次元形容詞の意味拡張--共感覚的用法を中心に」という研究テーマで日本語の「ながい・たかい・ひろい・ふかい・ふとい・厚い・おおきい・とおい」とその対義語である8組16語の次元形容詞¹⁸およびその関連語彙の共感覚現象について、綿密で、きめ細かい論述を提出している。以下のように「日本語次元・感覚形容詞による意味拡張の体系」(頼2005:101)を示している¹⁹。

(18)日本語形容詞の共感覚表現の方向(頼(2005:101))

¹⁷ 谷口(2003:162)は「共感覚の比喩表現」にみられるメタファーとメトニミーの連続性について、つぎのように指摘している。「(中略)もし「触覚」、「視覚」、「聴覚」などの感覚が、それぞれ分離した概念領域であるとすれば、領域の変換が生じているという点で、メタファーと言える。その一方で、これらの感覚がより高次の感覚領域に統合され得るならば、単一の領域内で指示が転移する、メトニミーであるということになる。」

¹⁸ 山梨(2000:8)が述べたように、我々言語使用者はつねに五感、空間認知などの認知能力から、言語現象を動的に捉えられていくアプローチにより、つまりメタファー、シネクドキー、メトニミー(認知的比喩)に基づいて、言葉(例えば、「大きい・高い・浅い」などの次元形容詞)の意味を拡張・転用・理解しているのである。

¹⁹ 全く同じ図を描くことはどうも難しいので、多少変化をくわえたものである。予めお断りして、ご諒承をいただきたい。



上記の図で注意すべきなのは、共感覚表現の「多方向性」の主張である。頼(2005)は次元形容詞の意味体系や意味構造を考察したうえで、さらに、次元形容詞とほかの類別に属する形容詞とのあいだにみられる共感覚の現象を論述し、先行研究の紹介と批評をしながら、豊富な実例をあげている。湯(2006,2008)・劉(2007)に提出された「日本語形容詞の下位分類」は頼(2005)のそれと異なるものであるが、以下の部分は本稿と主張を一致にするものである²⁰。

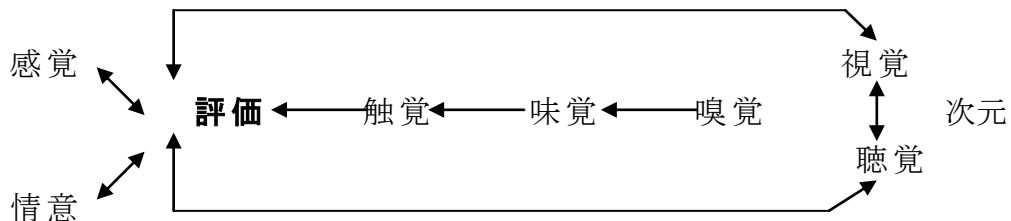
(19)「ある感覚モダリティから直接に他の感覚モダリティに転用しない共感覚的用法の場合は、基本義のほかに、その形容詞の多義構造について考察する必要がある(たとえば、「うるさい色」「高い熱」など)。認知意味論的研究方法による多義語の意味構造に対する分析は、地味で有意義な作業である。」 (頼(2005: 101))

以上のように、先行文献を紹介しながら、日本語形容詞とその「共感覚的比喩表現」による「意味転換」との関係をみてきた。結論を先取りすれば、本稿では湯(2006,2008)・劉(2007)の論点を継承したものであり、次元形容詞からほかの類別の形容詞への転換はほとんど「評価形容詞」を経るという立場をとるものである。そこで、結果として、共感覚表現の意味転換は「双方向性」、さらに、「多方向性」になるのだと仮説する。

(vi)湯(2006,2008)

²⁰ ここでは、頼(2005)の貴重でありながら膨大な資料と例文を紹介する余裕がないので、あえて、「おわりに」のところで、以下のような主張を引用させていただく。

(20) 日本語形容詞の共感覚表現の方向



湯(2006,2008)は、形容詞間にみられる転換は、メタファーであるか、メトニミーであるかという点には、まだ探求の余地があるが、形容詞間にみられる方向性について、以下のような仮説を提出した。

(i)形容詞間にみられる意味の転換(比喩表現)は、一方向性ではなく、双方向性である(多方向性ではない)。(ii)形容詞間にみられる意味の転換は、「直接的」と「間接的」に区別することができる。前者は「きいろいろ声(視覚→聴覚)」「おおきい/ほそい声(次元→聴覚)」のような、原則的に評価的な意味をもたない表現である²¹。後者は、「視覚(次元からも可能)→評価」「評価→視覚(次元までも可能)」「味覚→嗅覚」「嗅覚→触覚」「味覚/嗅覚/触覚→評価」「評価→味覚/嗅覚/触覚」「評価→感覚」「評価→情意」「感覚→評価」「情意→評価」「感覚→情意」「情意→感覚」のような、双方向性の可能な表現である²²。ここで、もっとも注意されたいのは、感情形容詞と評価形容詞のあいだに、共感覚による(双方向の)転用が考えられるが、直接に感覚形容詞から知覚形容詞に、或いは、逆方向の転用が認められないことである。(iii)「触覚」から出発して²³、次元や視覚・聴覚に向う共感覚の方向性をも、再解

²¹ メトニミーによる表現の可能性が高い。

²² みな、主観性や直観性(評価性)が含まれる表現である。つまり、客観的な知覚(5つの知覚)表現から、直観的評価的表現に移行する方向がみられるし、主観・直観的表現はもともと客観的な知覚表現の修飾語になる方向もみられる。また、主観的な感覚・情意表現から、評価的な意味になったり、評価的な意味に移行してから、もともと客観的な知覚表現の修飾語になる方向も考えられる。こうした、間接的な共感覚表現の方向性は、原則的に「評価性」を経由して発生するから、メタファーによる表現と判断してもよろしいだろう。今後の研究課題にする。

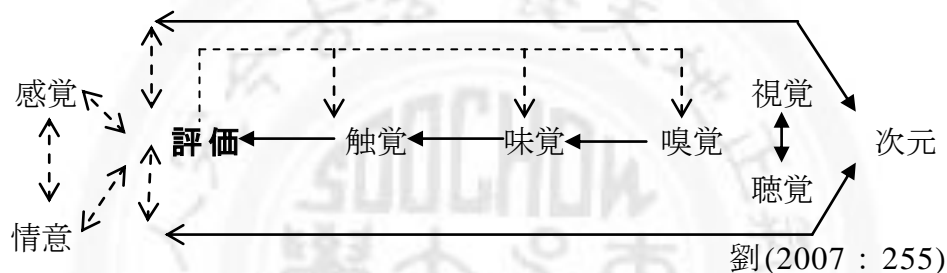
²³ 「〔筆者：人間の〕概念の多くは身体感覚の諸特性に動機づけられている」という「身体(性)基盤」(bodily-based)(辻(2001: 119))により、比喩表現に一定の方向性(身体性の高いほうから出発する)という認知言語学の基本的な考え方があるゆえに、共感覚表現は触覚から出発するという見方

積されることができるようになる。具体的にいうと、形容詞の転換は、他人にも識別されやすい「社会的通念」の度合いの高い「視覚・聴覚(次元も含む)形容詞」から、比較的「社会的通念」の度合いの低い「嗅覚・味覚・触覚」に移行するという仮説である。

(vi)劉(2007)

劉(2007)は語彙調査を行って、日本語形容詞の下位分類の基準と共感覚表現との関係を考察した。結果として、以下のように湯(2006,2008)の方向図を補足してみた。

(21)日本語形容詞の共感覚表現の方向



以上のように、「共感覚表現」の意味転換の方向性に関する先行文献をみてきた。

4. 総合的な「感覚・認知活動」に関わる言語の「共感覚的比喩表現」

4. 1 日本語の「オノマトペ」から「共感覚的比喩表現」をみる

それでは、形容詞表現と同じく「他人にも識別されやすい「社会的通念」の度合いの高い「視覚・聴覚(次元も含む)」から、比較的「社会的通念」の度合いの低い「嗅覚・味覚・触覚」に移行する」(劉(2007 : 254))という仮説の傍証になる形容詞以外の表現がみられるだろうか。以下では、「オノマトペに関する共感覚比喩表現」についての先行文献をみてみよう。

武田(2001)は日本語と中国語の「擬音語の擬態語化」という課題から、「共感覚比喩」に関する言語の普遍性を考察してみた。その所

が多いだろう。

以について、以下のようにまとめられている。

- (22) 従来、擬音語と擬態語の境界は曖昧にして論じられてきているが、そこに働く共感覚比喩は、換喩であることが多く、一方、擬態語のみの機能を有する〔筆者：中国語の〕A B B型形容詞に作用する共感覚比喩は、隠喩であることが多い。つまり、一般の擬音語には、時間的連続性に基づく換喩が作用するために、擬音語と擬態語は連続的なものであり、そのことが、両者の境界を曖昧にしているのである。また、擬音語の擬態語化が、従来の共感覚比喩の一方向性に符合しないのは、共感覚比喩が多様な比喩システムを包含しているからである。〔中略〕池上(1975:142)が指摘しているように、言語によってその比喩の方向性が特徴的に現われることもあり、本稿で扱った擬音語の擬態語化以外の共感覚比喩については、さらに詳細な分析が求められる。(武田(2001: 116-117))

実際には、日本語においては、「擬音語」と「擬態語」を合わせてオノマトペ(onomatopoeia)²⁴という語類がとくに豊富だといわれている。山梨(1988)によれば、「擬音語」は、人間が聴覚による外界への認知活動の(五感の一部の)分野の言語化した結果であるのに対し、「擬態語」はその他の分野の言語化した結果だといえる。前者は「聴覚を基にした感覚比喩」と定義され、後者は「その他の感覚を基にした感覚比喩」と指摘されている(山梨(1988)・武田(2001: 107-108))。そして、「擬音語」は「外界の音声を模写する語彙」であると字面からすぐわかるのに対して、「擬態語」は「外界の『状態』を『描写』する語彙」というように理解してもよからうか。

実際には、語彙調査でわかるように、日本語のオノマトペは音声形態からみると、「A B A B・AっBり・AんBり・Aっと・Aんと・Aなり・AーAー・AとAと・AんBり・A B りと・AっAと」などのように、バリエーションが多いけれども、調音的な規律性が感じ

²⁴ 「古代ギリシア語の「ὄνοματοποιία(オノマトポイア)」を由来とする英語の onomatopoeia(オノマトピーア)およびフランス語の「onomatopée(オノマトペ)」を日本語発音にしたオノマトピア、オノマトペア、オノマトペを用いる場合もある。」(Wikipedia: 'ja.wikipedia.org/wiki/'による)

られる。つまり、言語使用者が聴覚の分野で「擬音語」や「擬態語」の音声形態を言ったり、聞いたり、さらに念じたりする²⁵ことによって、「脳内」で具体的な音声模写、或いは抽象的な「状態描写」を「感覚・認知する」、さらに「理解」するのだと推論できる。

つまり、「擬音語」「擬態語」を含み、オノマトペ(onomatopoeia)²⁶の中に、さまざまな言語(本稿での研究対象の「日本語」)の感覚表現があり、それは言語の特殊な「音声形態」で言語使用者(人間)の「共感覚」を記したり、引き起こしたりするものである。

以上でわかるように、言語における「共感覚的比喩表現」は、「共感覚者」の脳内で起こる現象と違って、はっきりと「方向性」を区別することが難しく、それは、人間が言語を使用するとき、一体五感のどれが作動されるかと、区別しにくい場合が多いからであろう²⁷。

それでは、日本語形容詞に関する「共感覚的比喩表現」では、「五感」以外に、より抽象的・あいまいな「総合知覚による評価判断」に関わる場合も、「擬音語から擬態語へ派生する」と似ている言語活動のプロセスがみられるのだろう。以下のようにみしてみる。

4. 2 日本語形容詞の下位分類と意味転換の方向性

湯(2006,2008)・劉(2007)は日本語形容詞の「意味的特徴」(まず、

²⁵ 人間の言語活動に関する「脳神経科学的」研究はこの数十年間で、医学器械などの開発によってかなり進んできているといわれている。しかし、そのメカニズムは未だに神秘で、未解明な領地だと、我々一般人に思われている。それも古来、哲学者・心理学者・言語学者・脳神経医学研究者、さらに、20世紀に入ってから認知言語学者も含めて、懸命に取り組んでいる「人類の進化」に関わっている大きな課題だといえる。ここでは、やむを得ずにより一般的な言葉で、「言う・聞く」、さらに、あいまいな「念じる」(脳内にしか存在しない「音声形態」)というように述べておこう。

²⁶ 一般に「擬声語」の英語訳とするが、視点を換えて、広義な「擬態語」としてもよからう。

²⁷ その点からは、一部分の「共感覚者」が数字やアルファベットを聞くのではなく、見たら色を感じるという現象から、彼たちは実際に脳内でもっとあいまいで、複雑な「思いつく・考える」という「認知」作用でにより、「共感覚」が引き起こされるのかと連想できる。逆な視点から見ると、人間の脳内で起こる言語使用の過程も似ているだろうと推論できる。つまり、我々はつねに「言葉」を聞いたり見たりするのではなく、考えたら脳内で「五感」が作動されるのだと推測されている。だから、我々は「共感覚者」でなくても、言語の「共感覚的比喩表現」を理解も使用もする能力をもっているのである。

「基本義」を基にする)と「文法的特徴」(項構造と意味役割)を基準として分類を試行した。結果として、日本語形容詞は(i)「客観・属性形容詞」、(ii)「主観・感情形容詞」、(iii)「中間・評価形容詞」に分けることができると観察された。そして、それぞれは、さらに、「客観・属性形容詞」は①「知覚形容詞」と②「関係形容詞」に、「主観・感情形容詞」は①「感覚形容詞」と②「情意形容詞」に下位再分類できる。また、「中間・評価形容詞」は本格的に下位分類できないが、それらの評価対象別からみれば、(a)対象評価、(b)能力評価、(c)態度評価(d)その他(総合評価)、の4つのグループに分けることができると観察された。本稿では、語彙調査の結果をみながら、形容詞の「基本義」から「拡張された意味」への転換した一「プロトタイプの意味」から「共感覚的比喻表現の意味」への方向性を改めてみる。

(23) 「あたらしい」

- a. 「あたらしいキャベツ/家具」 (視覚；評価_{<+>}→評価_{<+>})
- b. 「この人が考えがあたらしい」 (視覚；評価_{<+>}→評価_{<+>})

(24) 「あらい」

- a. 「荒い皮膚」 (視覚；触覚→触覚)
- b. 「この犬は気性があらい」 (飛田・浅田(1991: 35))
(視覚；触覚→評価_{<->})
- c. 「うちの息子は金づかいがあらい」 (視覚；触覚→評価_{<->})

(25) 「おおい」

- a. 「{用事/雑用}がおおい」 (視覚；総合→視覚)
- b. 「ぼくは家にいることがおおい」 (視覚；総合→総合)
- c. 「髪が多い」 (視覚；総合→視覚)

(26) 「ふるい」

- a. 「ふるい図書館」 (視覚；評価_{<0>}→視覚)
- b. 「うちの父は頭がふるい」 (視覚；評価_{<0>}→評価_{<0>})
- c. 「ふるい値段」 (視覚；評価_{<0>}→評価_{<0>})
- d. 「古い考え方」 (視覚>評価_{<->})

(27) 「こい」

- a. 「こい茶色」 (視覚；味覚→視覚)
- b. 「関東は料理の味がこい」 (視覚；味覚→味覚)
- c. 「今日のスープはきのうよりこい」 (視覚；味覚→味覚)
- d. 「その講演の内容のこいものだった」

(飛田・浅田(1991：226))(視覚；味覚→評価<0>)

- e. 「血縁がこい」 (視覚；味覚→評価<0>)
- f. 「情がこい」 (視覚；味覚→評価<0>)
- g. 「彼の印象はこい」 (視覚；味覚→評価<0>)
- h. 「苦悩の色がこかった」 (飛田・浅田(1991：227))

(視覚；味覚→評価<0>)

(28) 「こまかい」

- a. 「こまかい、そして重い雪」 (落城 45)(視覚；触覚→視覚)
- b. 「細かい漣を立てた」(或る女・前 173) (視覚；触覚→視覚)

(29) 「すくない」

- a. 「あの家は、一番新しくって、ノミも少いし」
(自由学校)(視覚；総合知覚→視覚)
- b. 「学校の給食は量がすくない」
(飛田・浅田(1991：301))(視覚；総合知覚→視覚)
- c. 「この街は緑が少ない」 (『IPAL』)
(視覚；総合知覚→視覚)
- d. 「成功率/不安/反対の声が少ない」(視覚；総合知覚→総合知覚)

結論として、以下のようにまとめられる。

(i)形容詞の共感覚による転換は、「知覚形容詞」の内部で、比較的客観的な(知覚経験の共有しやすい)「知覚形容詞」からより主観的な(知覚経験の共有しがたい)「知覚形容詞」へ向かって移行する。

(ii)知覚形容詞の外部では、「属性形容詞」から「評価形容詞」へ、或いは、「評価形容詞」と「感情形容詞」とのあいだでは、「中間・評価形容詞」から「感情形容詞」へ、および、「感情形容詞」から「評価形容詞へ」、という双方向性がみられる。

(iii)日本語形容詞における共感覚は「双方向性」、さらに「多方向性」

をもつことになり、その方向性は本研究で提出した「客観・属性形容詞」「中間・評価形容詞」「主観・感情形容詞」の下位分類におおむね符合する。または属性形容詞に属する知覚形容詞の下位再分類の区別にもおおむね符合すると思われる。

4. 3 日本語における「評価形容詞」経由の「共感覚的比喩表現」²⁸

まず、亀井他(1996)にあげられる例を借りて、箇条書きで示しながら、今一度知覚形容詞が共感覚によって、どのような意味変化を生じるかを例文付きで試みる。

(30)視覚→聴覚：a.「{高い/低い/大きい/小さい}音」

b.「黄色い声」・いやに色気があって、そうして黄色い声を出す。(明治座の所感を虚子君に問れて・夏目漱石)

(30a)の「たかい・ひくい・おおきい・ちいさい」は視覚による識別・判断される形容詞というより、総合知覚²⁹による次元形容詞である。以上の使い方では、「音声の振動数——音高」や「音量」など、音声に関する基本的な表現になるので、次元形容詞から、聴覚形容詞に拡張される共感覚的用法だと言える。

そして、「高く鋭いという声の性質そのものを指すニュアンスがあり、声の発生のかたなどには言及しない...」(飛田・浅田(1991:172))という説明からわかるように、「きいろい声」とは「音声」に関する基本的な表現であるにもかかわらず、この例に関する「共感覚による転用の方向」を、より厳密に次のように表示できる。

「黄色い声」：「視覚(色彩)形容詞(黄色い)→聴覚形容詞+聴覚で捉えられたもの(声)」：つまり、比喩的な意味をもたず、直接に「視覚形容詞」

²⁸ 「評価判断」による日本語形容詞の「共感覚的比喩表現」でもいえよう。そして、「経由」という用語は、拙論を通覧なされた審査委員から貴重なコメントをいただいた通り、それは「意味転換のプロセスと方向性」を運動に関する用語で譬えたのである。そういうように意味が転換した結果、みな「評価性を帯びた」表現になったのであろう。

²⁹ 日常生活では、視覚によって識別・判断する可能性がもっとも高いが、手で触ることによって判断することも考えられる。

から「聴覚形容詞」に転換するのである。

実際には、共感覚による評価形容詞と共起する名詞に選択制限(selectional restriction)が比較的に緩い傾向がみられる。たとえば、「あかるい」はもともと明暗を表す視覚形容詞であり、普通「光の種類・場所・時刻」、さらに「色」と共起する。共感覚によって評価形容詞に拡張すると、「人・見通し・政治」(飛田・浅田(1991: 12-13))などさまざまな名詞と共起するようになる。

(31)視覚→味覚：「深い味」

・そのゆえに彼らの仕事は、味わえば味わうほど深い味を示してくる。(樹の根・和辻哲郎)

「ふかい」はもともと次元形容詞に属する。「色彩・味・香りなどの濃度が大きい様子を表す」(飛田・浅田(1991: 487))表現として、プラスイメージの評価性が含まれる共感覚的用法がある。この例に関する「共感覚による転用の方向」は、よりと厳密に次のように表示できる。

「深い味」：「次元形容詞_(深い)→評価形容詞+味覚で捉えられたもの_(味)」：つまり、「次元形容詞」から直接に「味覚形容詞」に転用するのではなく、まず、比喩的・評価的な意味が発生し、つぎに味覚で捉えられたものの修飾語になるのである。厳密にいうと、次元形容詞から評価形容詞に転換するのである。

(32)味覚→聴覚：「{a.甘い/b.渋い}声」

・なんとなく、うるおいのある甘い声。(大菩薩峠：無明の巻・中里介山)
・富本でこなれた渋い声で御生前よくこう言い言いして居られましたから、いずれこれには面白い因縁でもあるのでございましょう。(葉・太宰治)

(32a)の「あまい」はもともと味覚形容詞である。「音声・におい・雰囲気などが芳醇で快い様子を表す」(飛田・浅田(1991: 32))表現として使われる。飛田・浅田(1991: 32)によると、このような使い方は、きわめて主観性が高く、客観的な基準がない表現になる。だから、プラスイメージの評価的形容詞の用法に拡張すると考えられる。

(32b)の「しぶい」はもともと味覚形容詞である。「しぶい{芸/色/のど/声}」などのような表現における「しぶい」は、「派手でなく、奥深さを感じる様子を表す」(飛田・浅田(1991: 282))プラスイメージの評価的・共感覚の用法に拡張すると考えられる。

「{甘い/渋い}声」:「味覚形容詞_(甘い/渋い)→評価形容詞+聴覚で捉えられたもの_(声)」: 味覚形容詞から評価形容詞に転用してから、聴覚で捉えられたものの修飾語になる。

(33)味覚→視覚:「甘いピント」

・モニター上でピクセル等倍表示することによって、甘いピントがすぐにわかってしまうのです。(http://www.tamron.co.jp/lineup/a061/story02.html)

「あまい」はもともと味覚形容詞である。ピントやねじなどを修飾するとき、「程度が低く、不十分である様子を表す。[筆者: 中略]。満足すべき状態でないという意味」(飛田・浅田(1991: 32))を表すマイナスイメージの評価形容詞に拡張する。

「甘いピント」:「味覚形容詞_(甘い)→評価形容詞+視覚(触覚など)で捉えられたもの_(ピント)」: 味覚形容詞から評価形容詞に転換し、視覚で捉えられたものの修飾語になる。

(34)触覚→聴覚:「柔らかい声」

・口のあたりの痙攣、美しい優しい柔らかい声の中の、静かに流れて行くような屈曲。(エレオノラ・デュウゼ・和辻哲郎)

「やわらかい」はもともと触覚形容詞である。「春の日ざし・光・色・たばこ・声」などを修飾するとき、「程度がはなはだしくなくて、刺激が少ない様子を表す」(飛田・浅田(1991: 574))意味になる。この場合、「おだやか・まろやか」のような形容名詞の類義語になるから、評価形容詞に拡張すると考えられる。

「柔らかい声」:「触覚形容詞_(柔らかい)→評価形容詞+聴覚で捉えられたもの_(声)」: 触覚形容詞から評価形容詞に転換し、聴覚に関する名詞の修飾語になる。

(35)嗅覚→視覚:「どろくさい身なり」

「どろくさい身なり」『現代国語例解辞典』 第 931 頁／

・『語源のたのしみ』第 2 巻 - 第 58 頁 (GOOGLE 検索による)

この表現について、まず、「どろくさ_(泥臭)い」は臭覚形容詞なのかという問題から考える。実際には、「臭い」を後部形態素とする数多くの「～くさい」型形容詞は、一体臭覚形容詞であるか、評価形容詞に属するかをよく検討する余地がある³⁰。

そして、「～くさい」型形容詞は、調査した通り、総計 38 語のなかで、比喩的な意味がなく、純粋な嗅覚表現とするのは「かなくさい・さけくさい」2 語しかない(飛田・浅田(1991: 154, 258))。ほかの「あせくさい・いなかくさい」など「具体名詞+くさい」の語構造をもつ合成形容詞は、みな嗅覚表現としても比喩的な表現としても使われる。

結論として、「くさい」は臭覚形容詞から評価形容詞に拡張できるのに対して、「かなくさい・さけくさい」は純粋な臭覚形容詞である。そして、「身なり・格好・演技」などを修飾する「どろくさい」は、臭覚形容詞から「(身なり・服装・態度などが)洗練されていない様子を表す」(飛田・浅田(1991: 391))マイナスイメージの評価形容詞に拡張すると考えられる。そのときの「どろくさい」は「いなかくさい・つちくさい」とは類義語となる。

「どろくさい身なり」: 「臭覚形容詞_(どろくさい)→評価形容詞+(抽象的)サマ名詞_(身なり)」: 臭覚形容詞から評価形容詞に転換し、抽象的なサマ名詞の修飾語になる。

(36) 温度感覚→視覚/聴覚: 「{a.暖かい/b.冷たい}{色/声}」

・それが蛤はまぐりの貝のやうな、暖かい色をしてゐるのは、かすかな光の加減らしい。(好色・芥川龍之介)

・お客様の暖かい声をお聞かせください！(GOOGLE 検索)

・港を包む遠近をちこちの山の頂には冷たい色の雲が流れて、(修道院の秋・南部修太郎)

・スペイン式なミツシエルの温かさにくらべて、これはまた北国風な空疎な冷たい声を持つてゐた。(瑠璃盤・林芙美子)

(36a)の「あたたかい」も(36b)の「つめたい」も、もともと温度感

³⁰ 「～くさい」型形容詞の先行研究については頼(2001)を参照。

覚を表す「温覚・体覚」形容詞である。(36a)の「あたたかい」は「心・家庭・色・声」など具象的・抽象的な名詞を修飾するとき、「(心・性格・雰囲気が)温和で理解がある様子を表す」(飛田・浅田(1991:21))プラスイメージの評価形容詞になる。その場合は、「やさしい」と類義語となる。

(36b)の「つめたい」は、「仕手・まなざし・色・声」などを修飾するとき、「愛情や思いやりがない様子を表す」マイナスイメージの評価形容詞になる。「あたたかい」の反義語になると同時に、「つらい・つれない」とも類義語となる。

「{暖かい/冷たい}{色/声}」:「温覚形容詞_(暖かい/冷たい)→評価形容詞+視覚・聴覚で捉えられた名詞_(色/声)」:温覚形容詞から評価形容詞に転換してから、視覚・聴覚で捉えられたものの修飾語になる。

以上みてきたように、ある知覚形容詞から評価形容詞に拡張し、他の知覚表現に関する名詞を修飾する用例がたくさんある。このような「共感覚による転換」に関する言語活動でみられる形容詞は、一つの種類の形容詞(たとえば、視覚形容詞)から別種の形容詞(たとえば、味覚形容詞)に移行・転換したのか、或いは、「移行しつつある」のかと、検討の余地がある。ただし、本稿では、もともと多方向性のある「共感覚による意味転換」と思われる大部分の例が、「評価形容詞経由」という仮説を提出して、オリジナルな検証方法でみてきた。

5. むすび

本稿では、日本語形容詞における「共感覚的比喩表現」を対象としてその下位分類の視点から改めて考察してみた。研究範囲は日本語の「イ形容詞」と「ナ形容詞」を合わせる広義な「形容(名)詞」にするが、現段階の語彙調査の対象をまず「イ形容詞」にしばった。

研究方法としては、第一段階で「形態論」、「統語論」、「生成文法」に関する「述語の項構造・意味役割」を接近法として日本語形容詞の下位分類の基準と機能をみてきた。第二段階で、さらに、日本語形容詞の述語としての「統語構造」と「意味構造」とのあいだに、リン

キング・ルールにより「語彙概念構造」を分析してみた。

本稿では、研究の第三段階として、より深く日本語形容詞に関する認知的な「意味特徴」や「意味構造」を探求するために、それに関する「共感覚的比喩表現」にしぼって分析してきた。それは、形容詞はつねに言語使用者の人間が外界に対するさまざまな「感覚」を表現するとき使うものであり、しかも「感覚表現」においては、つねに「共感覚的比喩表現」がみられるからである。

現段階の結論としては、以下のように3点でまとめられる。

(1)日本語形容詞は(i)「客観・属性形容詞」(ii)「主観・感情形容詞」(iii)「中間・評価形容詞」に分けることができると観察された。そして、それぞれはその「意味的特徴」(意義素)と「文法的特徴」(項構造と主題役割)により、さらに、「属性形容詞」は①「知覚形容詞」と②「関係形容詞」に下位再分類でき、「感情形容詞」は①「感覚形容詞」と②「情意形容詞」に下位再分類できる。また、「評価形容詞」は本格的に下位分類できないが、それらの評価対象別からみれば、また4つのグループに分けることができると観察された。

(2)より深く日本語形容詞の「意味的特徴」を探求するために、形容詞の下位分類の視点から各類別間の「意味拡張」「意味転換」の現象についてみてみた。結果として、日本語の形容詞表現においては、とくに「五感表現」では、「共感覚的比喩表現」があると観察された(主に「知覚形容詞」から発生した)。

(3)日本語形容詞の「共感覚的比喩表現」の方向性について分析してみた。先行研究では、「一方向性」と「双方向性」、さらに、「多方向性」という見方があるが、本稿は、「多方向性」の論点を支持する。ただし、それは「感覚形容詞」と「情意形容詞」のあいだでも起こると強調するだけでなく、ほとんどは「評価形容詞」を経由した結果だという仮説を提出した。今後の研究課題として、先行研究における「コーパス研究」と「認知意味論」に関する成果を生かして、日本語形容詞の「意味的側面」「統語的側面」、さらに「認知的側面」をより深く考察することにする。

参考文献

1. 単行本

- 池上嘉彦(1975)『意味論－意味構造の分析と記述』、大修館書店、1975。
- 影山太郎(1999)『形態論と意味』、くろしお出版、1999。
- 影山太郎・由本陽子 (1997)『語形成と概念構造』、研究社、1997。
- 国広哲弥(1989)『意味論の方法』、大修館書店、1989。
- 情報処理振興事業協会技術センター (1990)『IPAL』(研究報告『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(Basic Adjectives)』)、情報処理振興事業協会技術センター、1990。
- 瀬戸賢一・楠見孝・辻本智子・山本隆・沢井繁男編著(2005)『味ことばの世界』、海鳴社、2005。
- 専門教育出版(1991)『一万語語彙分類集』、宇田出版社、1991。
- 谷口一美(2003)『認知意味論の新展開メタファイとメトニミー』、研究社、2003。
- 張鳳玲(2010)『中日味覚詞的多義構造—以「甘い」「甜」と「辛い」「辣」為中心—』(修士論文)、銘傳大學、2010。
- 辻幸夫(2001)『ことばの認知科学事典』、大修館書店、2001。
- 辻幸夫(2002)『認知言語学キーワード事典』、研究者、2002。
- 湯廷池(2012)(許淑慎/監修)『日語形容詞研究入門(下)』、致良出版社、2012。
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』(国立国語研究所報告 44)、秀英出版、1972。
- 日下部裕子・和田有史編著(2011)『味わいの認知科学』、勁草書房、2011。
- 山梨正明(1988)『比喩と理解』、東京大学出版会、1998。
- 頼錦雀(2001)『現代日本語形容詞の語構成論的研究』、大新書局、2001。
- (2004)『日本語感覚形容詞研究論文集』、致良出版社、2004。
- (2005)『日本語次元形容詞研究』、致良出版社、2005。
- 劉懿禎(2007)『現代日語形容詞の下位分類—分類基準と機能』(博士論文)、東吳大學日本語文學系、2007。
- (2009)『日語形容名詞的次類劃分—分類標準與功能』(The Taxonomy of the Japanese Nominal Adjectives --- the criteria and the merits)(国家科学研究会 97-2410-H-364-002-研究報告書)。

Derek Tastes of Earwax BS(2004)《“共感覚”の不思議・言葉を聴くと色が見えるなど～言葉誕生の謎に迫る～共感覚は創造力を助成するのか》(Derek Tastes of Earwax BS 制作 BBC(イギリス 2004 年))

2. 紀要論文

伊藤たかね(2005)「語彙概念構造とは」『(予稿集) 語彙概念構造辞書の構築と応用』pp1-8、(「心とことばー進化認知科学的展開」主催シンポジウム) 東京大学、2005。

影山太郎(2002)「形態論の進展ー語の形から意味・用法の研究へ」『日本の言語学』pp78-89、(「言語」30周年記念別冊)大修館書店。

蔡明興(2006)「五感與共感ー日本文學作品中感官的比喻表現與漢譯」『台灣應用日語研究 v.3』pp167-178、台灣應用日語学会。

酒井彩加(2008)「『共感覚的比喩』の一方方向性仮説」における反例の検証と課題ー (1) 』『琉球大学留学生センター紀要留学生教育第5号』pp11-18、琉球大学。

四宮俊之(2012)「りんごの甘酸適和をめぐる一考察」『人文社会論叢、人文科学篇第28号』pp13-36、弘前大学人文学部。

武田みゆき(2001)「中国語にみる共感覚比喩についての一考察ー擬音語の擬態語化をめぐる一」『ことばの科学 v.14』pp107-118、名古屋大学言語文化部言語文化研究会。

湯廷池(2006)「日本語形容詞の下位分類：分類基準と機能」(未公開の講義録、後に湯(2008)として発表)。

——(2008)「日本語形容詞の下位分類：分類基準と機能」『日本語日本文學 33』pp118-165、輔仁大學。

劉懿禎(2008)「日語形容名詞の下位分類ーその意味的特徴と文法的特徴を分類の基準として」『第一屆語言教學暨語言學研討會 論文集』、玄奘大學外國語文學系、2008。

3. 辞書と用例出典

亀井孝・河野六郎・千野栄一編著(1996)『言語学大辞典』三省堂

飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂。

青空文庫(インターネット電子図書館)：<http://www.aozora.gr.jp/>

GOOGLE 検索 website: <https://www.google.com.tw/>

付表(1) 形容(名)詞の下位分類と語彙概念構造

| 形容(名)詞の下位分類 | | 項構造と意味役割 (主題関係) |
|-------------|----------|--|
| 客観・属性形容(名)詞 | 知覚形容(名)詞 | [Th]: Th ^{は/が} A (です) 例: 山はたかい。 教室はしずかだ。 ps: 温覚形容詞の場合 [Th/Lo/Ti]: Th/Lo/Ti ^{は/が} A (です) 例文: このコーヒー/赤道/冬はあつ・暑い。 |
| | 関係形容(名)詞 | [Th (, So / Go / Co)]: Th ^{は/が} (So / Go / Co ^{から/に/と}) A (です) 例: 家は{駅から/学校に}{とおい/ちかい}。 娘は祖母{に/と}したしい。 牛乳はミルクとおなじだ。 戦争は平和の精神にはんたいだ。 |
| 中間・評価形容(名)詞 | 評価形容(名)詞 | [Th (, Go / Ra)]: Th ^{は/が} (Go / Ra) ^{が/に} (関係して/対して) A (です) 例: (私には) {父/姉}は{えらい/うつくしい}。 姉は{数学/星座/子供}{が/に/に}{よわい/くわしい/きびしい}。 姉はきれいだ。 |
| 主観・感情形容(名)詞 | 情意形容(名)詞 | [Ex , Th]: Ex ^{は/が} Th ^{は/が} A (です) 例: 私は{ペットの死/故郷}が{かなしい/なつかしい}。 私はおばあちゃんが{だい}すきだ。 |
| | 感覚形容(名)詞 | [Ex , (Ca) (Lo)]: Ex ^{は/が} (Ca) (Lo) ^{で/に} A (です) 例: 私は靴に入った小石 ^{で/が} 足 ^{が/に} いたい。 私はおなか ^が {痒い/べこべこ}だ。 |

付表(2) 日本語形容(名)詞の下位分類と語彙概念構造

<1> 客観・属性形容(名)詞

(i) 知覚形容(名)詞:

[y BE AT-z (高い・{静か/真っ赤/真っ直ぐ/...}だ)]

y = 外界のある対象 z = 状態 = 人間の五感知覚による判断される外界の対象のもつ客観的属性

(ii) 関係形容(名)詞:

[y BE AT-z {from z' (に/から遠い)/to z' (に/まで近い)/as z' ({に/と}等しい・親しい・{別々/同じ/反対/...}だ)}]

y = 外界のある対象 z = 状態 = 人間の総合的な認知能力で判断される外界の2つの対象のもつ

関係(属性) z' = (参照の)基準

<2> 中間・評価形容(名)詞:

[y BE AT-z (偉い・{綺麗・上手・...}だ)]

y = 外界のある対象

z = 状態 = 人間の総合的な認知能力によって判断される外界の対象のもつ主観的属性

<3> 感情形容(名)詞

(i) 情意形容(名)詞

[x EXPERIENCER [y BE AT-z (悲しい・なつかしい・{すき・心配・残念・...}だ)]]

y = 情意の「対象」や誘因 z = 状態 = 情意の内容

(ii) 感覚形容(名)詞

[x EXPERIENCER [y BE AT-z (痒い・{べこべこ・...}だ)]]

y = x(経験者)の身体にある器官・部位 (yはxによって束縛される) z = 状態 = 感覚の内容